都道府県別賞一等

今度は私が

広島県　広島県立広島中学校　三学年

角田　遥

私は祖父が大好きだ。明るくて、面白くて、優しい。私が小さい頃からよく遊んでもらった。私が大きくなったためもうできなくなってしまったが、「おさるのかごや」という童謡を一緒に歌いながらおんぶしてもらうのが楽しかったことを覚えている。今は遠くに住んでいるので、一年に一回会えるか会えないかくらいになってしまったが、遊びに行くといつも帰りたくなくなる。そんな祖父は、今年でもう八十一歳。「ずっと生きていてね。」と会うたびに言うが、「遥ちゃんが大学出るくらいまでは生きていたいね。」と返される。その言葉を聞くと、『あと十年くらいしかないよ。』という寂しい気持ちと、『まだあと十年一緒にいられる。』という嬉しい気持ちにいつも挟まれる。それでも、『まだ祖父は絶対に健康だ。』と、どこかで当たり前のように考えていた。

しかし、そんな安心感は一瞬で崩れた。「祖父が倒れた」という連絡が、祖母から来たのだ。そのとき私は、目の前が真っ暗になった。『もう目を覚まさないかもしれない。このまま死んでしまうかもしれない。』といった暗い考えが頭をよぎった。幸い、祖父は救急車で運ばれ、病院で治療を受けて、元気になった。それでも、人はいつ健康状態を保てなくなるか分からない、ということを身をもって感じた。

そんなとき、うちのポストに、父宛ての封筒が一通入っていた。父に渡すと、「生命保険会社からだ。」と言った。両親に聞いてみると、私も知らないうちに保険に守られていた。「入ってる意味ある?」と聞くと、「今の世の中何が起こるか分からないよ。起こってから後悔しても、どうしようもないよ。」と加入している理由を説明された。それを聞いた私はハッとし、祖父のことを思い出した。起こってから、『もっとこうしておけば……。』という気持ちが生まれたことに覚えがあったからだ。

私たちを守ってくれている生命保険に興味が湧き、実際に調べてみた。そして、生命保険とは、大勢の人が少しずつお金を出して助け合う、いわば〝支え合いの仕組み〟だと知った。「うちも、毎月保険料を払っている。」と両親が言っていた。支払った保険料の合計は決して安いものではないそうだ。また、生命保険には、死亡保険、医療保険と様々な種類があることも知った。

病気になったり、事故にあったりしたときに、医療費が支払われるのが医療保険だ。保険会社が費用を負担してくれることは、心の支えとなる。もちろん、

病気や事故にあわないことが一番だが、急に倒れた祖父のように、どうしても避けられないことはある。祖父もこの医療保険にお世話になったのだろう。祖父を救ってくれた保険会社には、本当に感謝しかない。元気印の私でも、気合いでなんとかなるものではない。

気になって検索した死亡保険にも深く考えさせられた。万が一誰かが亡くなってしまったときに、遺された家族にお金が支払われるのが死亡保険だ。命はお金で買えるようなものではないし、とても身近な人が亡くなる悲しさは計り知れない。でも、支払われたお金は、その後の家族の生活の助けとなるだろう。

私は、健康のありがたさと共に、生命保険で備えておくことの大切さを学んだ。「備える」ということは、ただお金を払うことではなく、「未来への不安や、するかもしれない後悔から、家族を守ること」だと気づいた。私たちのこれからをサポートしてくれる生命保険はとてもありがたいものだ。これからも祖父に長生きしてほしいし、一緒にたくさんの思い出を作っていきたい。そして、私が将来大人になったとき、今度は私が大切な家族を守るため、生命保険の仕組みをしっかり理解し活用できる人になりたいと思っている。